

大学入学共通テスト試行調査 2018.11

地理B

全体概要

制限時間	60分	配点	100点	大問数	5大問
出題分野	1) 世界各地の自然環境 2) 資源・エネルギーの開発と工業の発展 3) 世界の宗教・生活文化と自然環境・食文化の多様性 4) オセアニア地誌 5) 地域調査				
難易度	※対現行センター試験 やや易～標準				
解答形式	マーク式				
主な特徴	※対現行センター試験 解答に至るまでの思考力・考察力を問う問題が増加				

全体出題傾向

- ◆複数の資料から取り出した情報を統合し、地域や事象の特徴と課題を考察できる力が問われている
- ◆結果に至る過程への理解力、事象を共通化・差異化できる思考力、地域を多面的・多角的に考察できる分析力が問われている

現行のセンター試験と比べると、結果だけでなくその結果に至る「過程を問う」問題が目につく。「仮説」や「仮想地域」を立てながら考察していく出題形式は、センター試験ではなかったもので、今回の試行テストの特徴的な作問の一つと言える。与えられる資料(文章・図表・写真など)が多いのは従来通りだが、現行のセンター試験より大問が1問減っているにもかかわらず、全体の文章量が増加していることにも注目しておきたい。

2018年11月試行テスト【大問5→約9300字】 2019年(センター本試)【大問6→約9000字】

対策

- ◆結果だけでなく「なぜ」を考える習慣を
- ◆多様な資料から地理情報を読み取る技能を養う

例えば、世界の砂漠を学習するとしよう。この時、砂漠の名前と場所を覚える(知識)だけでなく、砂漠がどのようにして形成されたか(形成過程)を考える、世界の砂漠の共通点を探し、いくつかのグループにする(類型化)、さらに複数の砂漠を比較してその地域性(地域的差異)を考えるといった、過程の理解、事象の類型化、多面的・多角的に比較した結果もたらされる地域的差異などを分析できる考察力が、従来以上に増して重要となってくる。また、与えられた多様な資料(文章・図表・写真など)からの的確な地理情報を読み取る技能は、今後ますます重要になってくる。

大問別コメント

- 第1問** 自然環境。世界の自然特性を様々な角度から考える大問。従来通りの作問もあるが、試行テストでは、地形の形成過程や解答に至る思考過程が問われ、過程重視となっている。また、「例年に比べて暑い」ことを客観的なデータに基づいて示す方法を特定する問題は、センター試験ではなかった新しいタイプの問題となっている。
- 第2問** 資源・エネルギーの開発と工業の発展。従来の資源・エネルギーの出題は、産出(生産量)に焦点をあてた問題が中心であったが、試行テストでは、産出→加工→利用・消費の「流れ」が1つのパッケージになった問題構成になっている。また、製鉄所の立地変化を、仮想の地域を示しながら考えさせる問題は、共通テストに引き継がれそうな作問である。
- 第3問** 世界の宗教・生活文化と自然環境・食文化の多様性。学習成果を学校の文化祭で発表する場面を想定し、作成した展示資料をテーマに、会話形式などを取り入れながら考察する問題。共通テストでも、研究発表形式の資料提示型の作問は充分予想される。
- 第4問** 地誌。オセアニアを対象に、同地域を多角的・多面的に考察する問題構成になっている。移民の送出国をテーマに、ニュージーランドとカナダ(オセアニア以外の国)の共通性と差異性を分析する小問は、比較地誌的な視点からの出題。参考までに、現行のセンター試験では、比較地誌は大問1題(小問5)で出題されている。なお、この大問(第4問)のみ、複数選択の問題があり、小問8問中、2問が複数選択問題になっている。複数選択問題の復活とセンター試験から続く比較地誌の問題に注意したい。
- 第5問** 地域調査(大分市と別府市を中心とした地域)。身近な生活圏の地域調査を通じて、複数の資料から取り出した情報を統合し、そこから地域の特徴や課題について考察する力が問われている。ある地域が抱える課題が、他の地域でも抱える課題へと一般化できる思考力も問われる。「なぜ大分市で保育所不足が生じたのだろうか」という、地域が抱える課題に仮説を立て、その仮説を考えるもととなった図表を組合わせて選べる問題などは、複数の資料から取り出した情報を統合し、そこから地域の課題を考察させているので、思考力重視の問題をを目指す共通テストに、当然の引き継がれるべき良質な作問になっている。